

生命にかかわる思想はどのような歴史をたどってきたのか。「生命観」を手がかりに文学史を読み直している文芸評論家の鈴木貞美さんに聞いた。

文学が伝える「いのち」の思想

地球環境問題、バイオによる遺伝子組み換え、クローン戦争、自爆テロなどを前に、今日ほど生命観が鋭く問われている時代はない。「いのち」や生命観の問題は漠然としていて、個人によってずいぶん違いがあり、哲学、宗教、芸術、さらに生命工学などの自然科学にまたがる大きなテーマといえます。

日本で「いのち」という言葉が大きく浮上したのは日露戦争後でしょう。無理な作戦や重火器の進歩で、膨大な犠牲者を生みだしたからです。工業化が進み、身体を損なう労働者が増え、女工哀史の悲劇も生まれました。二十世紀初頭のヨーロッパでは、「生命の流れ」と知覚を重視したベルグソンの哲学などを中心に、色々な生命主義(生命を根本に置く思想的態度)が台頭しました。日本

新しい生命主義を感じる

の場合、こつしたヨーロッパの生命主義に加えて、古代からある日本人の自然崇拜の民俗信仰、神道、儒学、仏教などの伝統的な生命観が結びつき、大正期には豊かで多様な生命主義が開きました。

■鈴木さんは一九九二年に文芸誌「文芸」に「大正生命主義―隠蔽された可能性―を発表するなど日本近代文学を二十年近

く「生命観」から読み直し、生命をキーワードに哲学、思想、宗教、美術、武道などを見直す研究を進めてきた。

大正期にはほとんどの文学者が「生命の表現」こそが文学であるとする生命主義に染まりました。有島武郎らの白樺派の人たちはトルストイやロタンやホイットマンの影響を受け、宇宙の背後にある永遠の生命や「内なる真生命」をたたえ、闘争ではない相互扶助の精神を唱えました。斎藤茂吉は「短歌は直ちに『生のあられ』でなければならぬ」、すなわち「生命の表現」だと主張しました。日本の私小説や心境小説を支えたのも生命主義です。どんなに日常の小さなことでも、個人の感覚や情念をつづることも、リアルな生命の表現だと考えます。興味深いのは古典が大正期に生命主義の視点から再発見されたこと。芭蕉の俳句は宇宙の生命の表れであると再評価されたのです。

■鈴木さんは生命主義の弊害も指摘する。戦争中は、個人の命を民族全体の命と一体化させればよいとの考えが強調され、「大義」や「滅私奉公」の精神を後押しした。

敗戦後すべに坂口安吾が「墮落論」で「生きよ、墜ちよ」と呼びかけ、「私のいのち」が何よりも大事だと主張したのは「滅私奉公」の裏返しで痛烈な批判です。

七〇年代からは環境への関心や公害問題の高まりで、物質的な豊かさを優先する文明に反省を迫る生命主義が復活しましたね。大庭みな子の『浦島草』や中上健次の『奇蹟』などの小説、宮崎駿の『風の谷のナウシカ』などのアニメには、人間中心主義ではなく動植物や自然環境を含めた「大きな生命」、新しい生命主義が感じられます。それは川上弘美の『蛇を踏む』など今日の小説にも流れています。

(聞き手は 編集委員 浦田憲治)

文芸評論家

鈴木 貞美さん

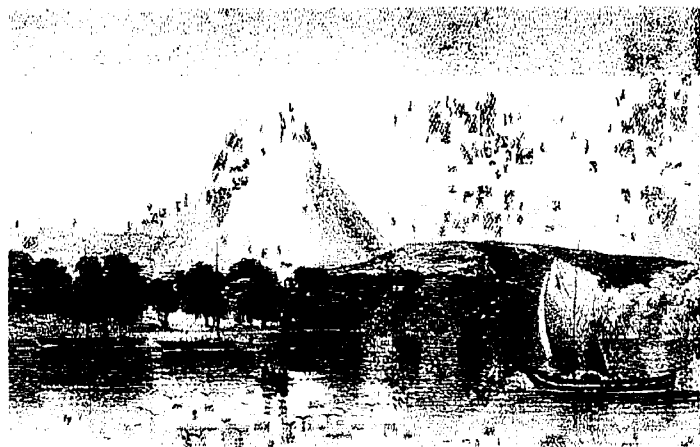
(すずき・さだみ) 1947年生まれ。東大仏文学。小説評論、近代文学研究を手がける国際日本文化研究センター教授。著書に『権井基次郎の世界』『日本の「文学」概念』『生命観の探究』など。

夕刊文化



西関悠夕

「異邦人のまなざし」日文研が刊行



「日本遠征日本と世界一画」(部分、1855年)に収められていた「フジヤマ」(日文研蔵)

幕末・明治期の図版に注目

「富士山」は現在でも、外国人が「日本」と聞いて思い浮かべる事物の上位とされるが、このイメージは「開国直後に醸成された」と白幡教授は見る。かなりの収集本に富士山に関する記述があり、三冊にわたる富士山の挿絵が掲載されているからだ。

「芸者」もまた、外国人に日本をイメージさせる代表格にあげられるが、収集本には芸者の挿絵は案外少ないという。旅行が自由になっても、外国人が「芸者」に接する機会は少なかったことなどが考えられる。

興味深いのは、写真説明の文言に「芸者」が用いられていることだ。関西で「芸者」は「たいこもち」を意味し、東京で言う「芸者」は「芸子」

フジヤマ・芸者・白幡教授の自由集

カルチャー Culture

国際日本文化研究センター(日文研、京都市)が創立二十周年を記念して今春から、「異邦人のまなざし」と題し、開国直後の日本を描いた挿絵や写真を掲載するシリーズ本の刊行を始めた。収録挿絵や写真は外国語書籍(略して外書)に掲載されたものに限定、外国人の日本への関心のありようや、当時の社会状況を浮かび上がらせる狙いがある。

同センターは一九八七年、怪「子ども」遊び」の五冊を刊行。すべて約七十頁の大半を外書の説明文を付けた挿絵と写真で構成、同センターの教授陣が序文を寄せた。「富士山」で面白いのは、開国後間もない時期の挿絵の多くが海から眺めたアングルになっていることだ。政府が一般外国人に禁止していた日本国内旅行を認めたのは一八九九年。総合監修を務める白幡洋三郎教授は「海からのアングルが多いのは旅行制限の



「日本江戸版第6部」第10部(1897年)中の「芸者の踊り」のための楽団(日文研蔵)

影響」と話す。それを裏付けるように初期の挿絵には極端にとんがった富士山もみられ、旅行制限が解かれ写真も普及するにつれて奇妙な山容の富士山は姿を消す。

挿絵の説明文言で最大の謎は、白幡教授は「富士山をフジヤマと表記するのが通例になっている」と指摘し、今後の研究課題としている。

シリーズ本の今後のテーマは「将軍」や「学校」といった制度的なものや、「日本食」「祭り」など日常生活に関するものを考えている。同センターは毎年五冊出し、計三十冊の刊行を予定している。テーマを広げること、百五十年ほどの間に変わったものと変わらないもの、外国人の日本の事物に対する関心の推移をヒシリアルに示し、現在の日本文化のありようを解き明かすのが最終的な目的だ。

(編集委員 小橋弘之)